

## 音楽のリズム即興における表現特徴と性格特性との関連性について

中島 美穂\* 秋光 恵子\*\* 岡本 祐子\*

Influence of personality traits on expression in musical rhythm improvisation

Miho NAKASHIMA, Keiko AKIMITSU, Yuko OKAMOTO

The purpose of this study was to investigate the relationship between personality and characteristics in rhythm-improvisation of music. Sixty-eight undergraduates were asked to fill out a Five-Factor Personality Questionnaire (FFPQ) and to improvise musical rhythms on 6 types of percussion instruments. As a result, it was suggested that some personality traits were reflected in specific characteristics of expression in rhythm-improvisation of the music. In addition, these results suggest that some affects were influenced by specific characteristics of expression in musical rhythm improvisation. These findings suggest that some personality traits can be characterized by the types of rhythm-improvisation and the affects of improvisation has more influence on it. These results may be used as one of the initial objective indicators for music therapy.

**Key words:** rhythm, personality, musical rhythm, Five-Factor Personality Questionnaire, music therapy.

### 問題

我々は日頃、音楽を聴いて癒されたり、音楽を用いて自己を表現したり他者とコミュニケーションを図ったりするという体験を少なからず持っている。音楽療法とは、その音楽の力を利用した心理・作業療法的アプローチであると言っても良いだろう。日本音楽療法連盟は音楽療法の定義を「音楽のもつ生理的、心理的社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」としている。欧米の後を追って、近年、日本でも音楽療法が、医学、心理学、音楽学など様々な方面から注目され、盛んに実践されるようになった。その実践は益子(1996)によると、2種類に分類することができる。クライアントが音楽を聴くことより刺激材料として使用する(受動的に音楽を使用する)場合と、クライアントが楽器を使用して演奏に参加する(能動的に音楽を使用する)場合の2種類である。

前者の、受動的に音楽を使用する方法においては、気分誘導に音楽を用いることの有用性が示唆されており(谷口, 1991a, 1991b), その効果が盛んに取り入れられている。具体的には、医学的治療場面での患者の不安の軽減や化学麻酔の補助的役割として、また、多くの医療施設

---

\*広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

\*\*兵庫教育大学 (Hyogo University of Teacher Education)

では、音楽がバックグラウンド・ミュージックとして取り入れられている。そして、療養施設などでも、高齢者の日常生活での気分の高揚のためなどに取り入れられている。もっとも、我々の日常においても、「癒し」としてのCDの需要があるなど、受動的な音楽療法としての音楽の存在は、身近なものであると考えられる。後者の、能動的に音楽を使用することについてであるが、能動的音楽療法場面として、益子(1996)はまず、作業療法の場面を挙げている。益子は、楽器を使ったセッションでは、楽器を演奏するという肉体的な作業がクライアントにカタルシスを与える働きがあると述べている。打楽器で、力を入れてたたいて大きな音を出すことや、テンポやリズムを合わせることで自発的な協調性を生み出すことなどである。次に音楽を使ったカウンセリングの場面を挙げている。セラピストとクライアントが即興演奏をし、症状の改善を図るやり方などである。

このように、日本における音楽療法は、音楽聴取時の認知的側面を研究するものや、特定の対象に音楽療法を適用し症状が改善されたという事例研究などに集約することができ、リズムやハーモニーや音やメロディや構造や形式といった、音楽そのものの要素に注目した基礎的・実証的研究の蓄積が、他の心理療法と比較しても圧倒的に少ないということが挙げられる。その背景には、現場で実際音楽療法的アプローチを行っているのが、音楽家や作業療法士であることが多いことが考えられる。つまり、音楽を感覚的に理解した実践が先行し、その効果を心理学的に分析するまでには至っていないことが多いと考えられる。臨床場面で音楽療法を導入するには、音楽のどのような側面が、クライアントの何に影響を及ぼすのかを実施者が知っていなければならないだろう。更に、稲田(2003)は、日本の音楽療法の現状に対して「人と人々が積極的に、音楽的・情緒的に関わっていなければ音楽療法とは言えず、また、音楽療法では、音楽を提供するのは人間であり、機械であってはならない」と指摘しているように、即興による音楽療法が音楽療法の本質であると考えられるだろう。ここで、「即興による音楽療法」とは、クライアントの表現を手がかりにして、クライアントの気持ちを感じ取り、それに対してセラピストが即興的に応じることから、両者の間に、相互交流が生まれることを目指している音楽療法であると石村・高島(2001)は述べている。欧米の代表的な即興音楽療法モデルでも、クライアントの即興演奏をセラピストが聴き、その演奏や反応から、直接クライアントのパーソナリティや感情を理解しようとしている。このことからわかるように、即興による音楽療法を扱うとき、セラピストが、クライアントのどのような部分が即興演奏のどのような要素に反映するかを客観的に認知することは、大変重要であると考えられる。また、Robertson-Gillam(1997)は、創作(作曲)する活動を通して、クライアントは自分自身の側面を発見ことができると主張している。すなわち、即興による音楽療法では、クライアントの無意識やパーソナリティがその即興演奏に投影されている可能性が考えられる。このクライアントの無意識やパーソナリティが作品の中に投影されるという考え方は、箱庭療法やコラージュ療法にも共通している。川口(2002)は、箱庭療法の基礎的研究として、箱庭作品と制作傾向との関連性を研究した。また、佐藤(1998, 2002)、佐野友泰・関口洋美・井上理沙・土田昌司(2000)は、コラージュ療法の基礎的研究として、絵画の各種の表現の内容的特性と作品制作者の性格特性との関連を検討し

た。これらと同様に、非言語的な芸術療法という共通点から考慮して、即興による音楽療法においても、個人のあらゆる性格特性は作品特性に反映されると考えることができる。

以上のことから、本研究では、性格検査で測定された各特性と、その対象者が演奏した音楽の特徴との関連を調べ、リズム即興に性格特性が反映されるのか、されるとすればどのように反映されるのか、ということ进行调查することを目的として行った。リズム即興とする理由としては、リズムは音楽の要素の中でも最重要項目の一つである上、実際の現場では、演奏に比較的技術を要さない打楽器を用いて、リズム表現をするという方法が一般的であるからである。本研究では、山崎(2002)の分析で用いられた要素を参考にして、「音密度(対象者が演奏した時間の中でどれだけ音をたたいたか)」、「取りかかり(教示後から演奏が開始するまでの時間)」、「楽器変化数」、「使用楽器の種類」、「リズムカテゴリー(①繰り返し②単調③その他)」の要素でもって分析する。性格特性の分析には、5因子性格検査(Five-Factor Personality Questionnaire: 以下“FFPQ”とする)を用いる。FFPQは、辻ら(1998)が考案した150項目からなる質問紙形式の尺度である。FFPQの5因子とは、①内向性—外向性、②分離性—愛着性、③自然性—統制性、④非情動性—情動性、⑤現実性—遊戯性であり、これらを超特性と呼んでいる。さらに1つの超特性に対して5つの要素特性から構成されており、合計すると25の要素特性から性格特性を検査することが可能である(Table1参照)。近年の性格に関する特性論的研究領域では5因子モデルが定説となりつつある点や、本研究で関与の深いと思われる「遊戯性」の概念を含んでいる点、また、FFPQは価値中立的であるという特徴を持っている点を考慮して、本研究ではFFPQを用いるものとした。

Table1. FFPQの超特性と要素特性

超特性	要素特性
I. 外向性—内向性	①活動—非活動、②支配—服従、③群居—独居、④興奮追求—興奮忌避、⑤注意獲得—注意回避
II. 愛着性—分離性	①温厚—冷淡、②協調—競争、③信頼—警戒、④共感—非共感、⑤他者尊重—自己尊重
III. 統制性—自然性	①几帳面—大まか、②執着—無執着、③責任感—無責任、④自己統制—衝動、⑤計画—無計画
IV. 情動性—非情動性	①心配性—のんき、②緊張—弛緩、③抑うつ—非抑うつ、④自己批判—自己受容、⑤気分変動—気分安定
V. 遊戯性—現実性	①進取—保守、②空想—実際、③芸術への関心—芸術への無関心、④内的敏感—内的鈍感、⑤奔放—堅実

## 方法

**対象者** 大学生・大学院生 68名 (男性 28名, 女性 40名, 平均年齢 20.4歳, 標準偏差 0.16).

**準備した楽器** バスドラム・シンバル・カスタネット・スズ・タンバリン・和太鼓.

**手続き** 個別場面で行った. FFPQ と『音楽経験についてのアンケート』を実施した後, <実験 1>として, 「①喜び②悲しみ③怒り」という感情をランダムに提示し, それらの気持ちを楽器の音で表現してもらった. 次に<実験 2>として, 対象者の内面を自由に即興演奏してもらった. 対象者の了承の元, 実験 1, 2 はすべてテープレコーダーによって録音した.

### 分析方法

#### 対象者の属性について

『音楽経験についてのアンケート』から対象者の属性を分析したところ, 今回の対象者はいずれも教育大学生であり, アンケート結果からも, 音楽大学生と比較すると特別な音楽経験(特に打楽器に関して)はないと考えられた. よって今回の実験では, 対象者すべてを“音楽経験なし群”と見なした分析を行った.

#### 分析Ⅰ 表現特徴と FFPQ との関連性

対象者が演奏したすべてのリズム即興のテープを聴き, 実験者が[四分音符=60]を目安に楽譜に起こした. そして, それをもとに表現特徴(音密度・取りかかり・楽器変化数・使用楽器の種類・リズムカテゴリー)と性格特性(FFPQ)の関連を分析した. 音密度・取りかかり・楽器変化数については, 平均値によって対象者を H, L 群の 2 群に分け, それらを独立変数, 性格特性を従属変数として t 検定を行った. また, 使用楽器の種類・リズムカテゴリーについてはそれらを独立変数, 性格特性を従属変数として  $\chi^2$  検定を行った. なお音密度・取りかかりの分析においては, 分布の正規性を考慮して対数変換を行った.

#### 分析Ⅱ 表現特徴と課題との関連性

課題(喜び・悲しみ・怒り)を独立変数, 表現特徴を従属変数として課題と表現特徴との関連性を分析した. 音密度・取りかかり・楽器変化数については, 一要因 3 水準の分散分析を行い, 使用楽器の種類・リズムカテゴリーについては  $\chi^2$  検定を行った.

## 結果

### 分析Ⅰ 表現特徴と FFPQ との関連性

#### 1. 音密度と FFPQ との関連性

t 検定の結果を Table 2 に示す. 音密度の低い群は<情動性><sup>1</sup> ( $t=-2.20$ ,  $df=66$ ,  $p<.05$ ) 「心配性」 ( $t=-1.96$ ,  $df=66$ ,  $p<.05$ ) 「緊張」 ( $t=-1.90$ ,  $df=66$ ,  $p<.01$ ) 「抑うつ」 ( $t=-1.88$ ,  $df=66$ ,  $p<.01$ ) 得点が有意に高かった. また, 「空想」 ( $t=-1.76$ ,  $df=61.7$ ,  $p<.10$ ) や「内的敏感」 ( $t=-1.67$ ,  $df=66$ ,  $p<.10$ ) 得点が高いという傾向もみられた.

<sup>1</sup>以下では, FFPQ の超特性を<>, 要素特性を「」, 実験課題を“ ”で表記する.

Table 2. 音密度とFFPQのt検定結果

FFPQの項目	音密度高	音密度低	t値
	M (SD)	M (SD)	
情動性	88.21 (20.03)	98.76 (19.45)	-2.20**
心配	20.77 (5.36)	23.30 (5.30)	-1.96*
緊張	18.03 (4.99)	20.30 (4.86)	-1.90**
抑うつ	14.20 (5.15)	16.59 (5.27)	-1.88*
空想	18.97 (3.84)	20.88 (5.03)	-1.76+
内的敏感	23.60 (4.13)	25.15 (2.96)	-1.67+

+p<. 10, \*p<. 05, \*\*p<. 01, \*\*\*P<. 001.

## 2. 取りかかりとFFPQとの関連性

t検定の結果をTable 3に示す。取りかかりの早い群は取りかかりの遅い群よりも「衝動」得点が有意に高かった ( $t=1.77$ ,  $df=66$ ,  $p<. 01$ )。また、取りかかりの早い群は「注意回避」 ( $t=2.09$ ,  $df=66$ ,  $p<. 05$ ) 得点が有意に高く、「群居」 ( $t=-1.73$ ,  $df=66$ ,  $p<. 10$ ) 得点が高い傾向にあった。

Table 3. 取りかかりとFFPQのt検定結果

FFPQの項目	取りかかり早	取りかかり遅	t値
	M (SD)	M (SD)	
衝動	17.66 (4.42)	15.74 (3.74)	1.77**
注意回避	18.05 (3.58)	19.81 (3.33)	2.09*
群居	21.91 (4.37)	20.00 (4.37)	-1.73+

+p<. 10, \*p<. 05, \*\*p<. 01.

## 3. 楽器変化数とFFPQとの関連性

t検定の結果をTable 4に示す。楽器変化数の多い群は<外向性> ( $t=1.95$ ,  $df=66$ ,  $p<. 05$ )、  
「活動」 ( $t=2.50$ ,  $df=66$ ,  $p<. 01$ ) 得点が有意に高く、「注意獲得」 ( $t=1.76$ ,  $df=66$ ,  $p<. 10$ ) 得点が高い傾向にあった。また、<統制性-自然性>の中の「執着」得点が高い傾向にあった ( $t=1.78$ ,  $df=66$ ,  $p<. 10$ )。また、<遊戯性-現実性>の中の「芸術への感心」得点が高い傾向にあった ( $t=1.78$ ,  $df=66$ ,  $p<. 10$ )。

## 4. 楽器の種類とFFPQとの関連性

$\chi^2$ 検定の結果をTable 5に示す。パストラの使用度が高い群は、<情動性-非情動性>の中の「心配性」得点が有意に高く ( $\chi^2=4.3$ ,  $df=1$ ,  $p<. 01$ )、「緊張」 ( $\chi^2=3.2$ ,  $df=1$ ,  $p=. 072$ )

得点が高い傾向にあった。また、シンバルの使用度が低い群は、「緊張」( $\chi^2=3.5$ ,  $df=1$ ,  $p<.060$ ), 「気分変動」( $\chi^2=3.0$ ,  $df=1$ ,  $p<.085$ ), <遊戯性-現実性>の中の「空想」( $\chi^2=2.7$ ,  $df=1$ ,  $p<.98$ ) 得点が高い傾向にあった。カスタネットの使用度が高い群は、<統制性-自然性>の中の「執着」得点が高い傾向にあった( $\chi^2=3.3$ ,  $df=1$ ,  $p=.070$ )。また<遊戯性-現実性>の中の「奔放」得点が有意に高かった( $\chi^2=5.4$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。タンバリンの使用度が高い群は、<外向性-内向性>の中の「注意獲得」( $\chi^2=3.9$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ), <統制性-自然性>の中の「自己統制」( $\chi^2=4.2$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ) 得点が有意に高かった。また、タンバリンの使用度が高い群は、<統制性-自然性>の中の「執着」得点が高い傾向にあった( $\chi^2=2.7$ ,  $df=1$ ,  $p<.099$ )。和太鼓の使用度が高い群は、<情動性-非情動性>の中の「自己受容」( $\chi^2=2.9$ ,  $df=1$ ,  $p=.088$ ), <遊戯性-現実性>の中の「保守」( $\chi^2=2.9$ ,  $df=1$ ,  $p<.087$ ) 得点が高い傾向にあった。

Table 4. 楽器変化数と FFPQ の t 検定結果

FFPQ の項目	楽器変化数が多い群	楽器変化数が少ない群	t 値
	M(SD)	M(SD)	
外向性	103.39(12.1)	96.91(13.47)	1.95*
活動	20.73(3.31)	18.47(3.65)	2.50**
注意獲得	19.95(3.44)	18.37(3.53)	1.76+
執着	20.75(4.27)	18.91(4.34)	1.78+
芸術への関心	24.30(4.11)	21.29(5.06)	1.78+

+ $p<.10$ , \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ .

Table 5. 楽器の種類と FFPQ の  $\chi^2$  検定結果

楽器の種類	その楽器の使用度が高い性格特性
バスドラ	「心配性」* 「緊張」+
シンバル	「緊張」+, 「気分変動」+, 「空想」+
カスタネット	「執着」+, 「奔放」**
タンバリン	「注意獲得」*, 「自己統制」*, 「執着」+
和太鼓	「自己受容」+, 「保守」+

+ $p<.10$ , \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ .

### 5. リズムカテゴリーと FFPQ との関連性

単調なリズムが多い群は、<遊戯性-現実性>の中の「内的敏感」得点が高い傾向にあった( $\chi^2=5.3$ ,  $df=2$ ,  $p=.071$ )。

## 分析Ⅱ 表現特徴と課題（感情）との関連性について

音密度・取りかかり・楽器変化数についての分散分析の結果を Table6 に示す。

### 1. 音密度と課題との関連性

“悲しみ”の音密度の平均値が、その他の課題と比較して有意に低かった ( $F(3, 201)=14.29$ ,  $p<.01$ ).

### 2. 取りかかりと課題との関連性

“喜び”の取りかかりの平均値が、“悲しみ”と比較して有意に低く、“自由”の取りかかりの平均値が“喜び”と比較して有意に高かった ( $F(3, 201)=8.89$ ,  $p<.01$ ).

### 3. 楽器変化数と課題との関連

“自由”のときの楽器変化数の平均値が、他の平均値よりも有意に高かった ( $F(3, 201)=11.57$ ,  $p<.01$ ).

Table 6. 3つの表現特徴と課題との分散分析結果

	喜び	悲しみ	怒り	自由
音密度	-.00(.45)	-.26(.42)***	.05(.40)	.16(.23)
取りかかり	.80(.36)***	.98(.32)	.93(.27)	1.03(.45)***
楽器変化数	1.67(1.92)	1.16(.56)	1.15(.36)	3.63(5.63)***

\*\*\* $p<.001$ .

### 4. 使用楽器の種類と課題との関連性

使用楽器の種類別に課題の出現度数を示したものが Figure1 である。全体的に、カスタネットの使用が他の楽器と比較して有意に低かった ( $\chi^2=132.9$ ,  $df=15$ ,  $p<.01$ )。また、バズドラが“喜び”ではほとんど使用されず、“怒り”において最も高く ( $\chi^2=59.0$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )、シンバルが“喜び”ではほとんど使用されず、“悲しみ”“怒り”では比較的多く使用され ( $\chi^2=19.4$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )、さすが“怒り”ではほとんど使用されず、“喜び”では比較的多用され ( $\chi^2=46.1$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )、タンバリンが、“悲しみ”“怒り”では比較的使用されず、“喜び”では比較的使用され ( $\chi^2=24.7$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )、和太鼓が“悲しみ”では比較的使用されない ( $\chi^2=14.26$ ,  $df=3$ ,  $p<.05$ )ということがそれぞれ有意に明らかになった。

### 5. リズムカテゴリー（①繰り返し②単調③その他）と課題との関連性

リズムカテゴリーの度数を、即興課題ごとに示したものが Figure2 である。“喜び”“悲しみ”“怒り”の課題では「単調」のカテゴリーの度数が有意に高いのに対して、“自由”では「繰り返しの度数が有意に高かった ( $\chi^2=35.71$ ,  $df=6$ ,  $p<.01$ )。

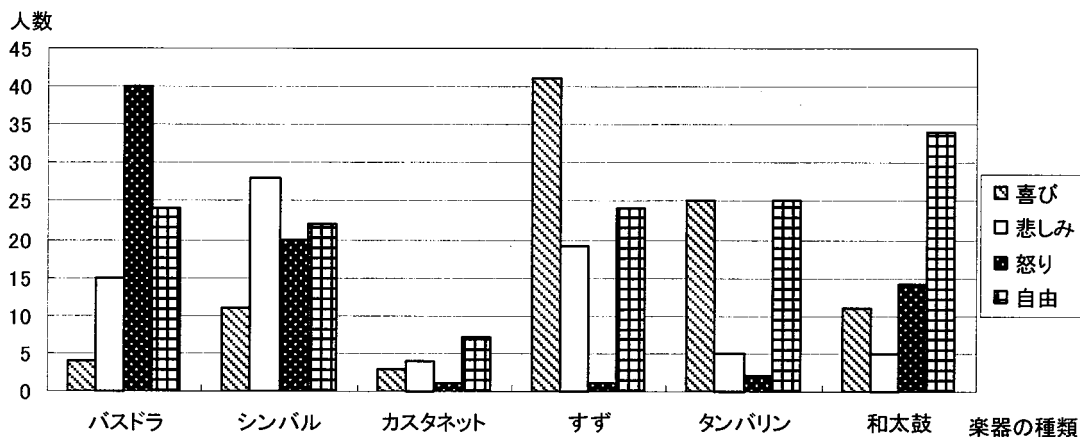


Figure1. 課題と使用楽器の種類との関連

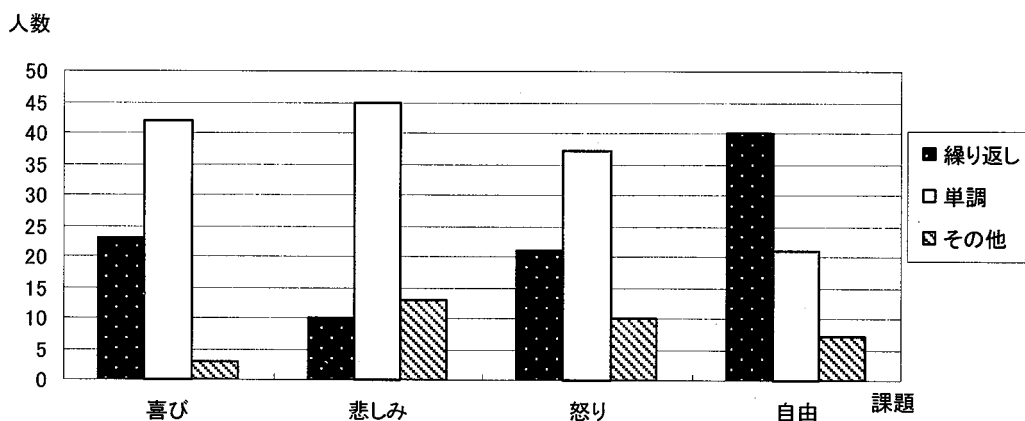


Figure 2. 課題とリズムカテゴリーとの関連

## 考察

本研究では、即興的音楽療法における客観的指標になりうるひとつの試みとして、5因子性格検査(FFPQ)を用いて、“外向性”、“愛着性”、“統制性”、“情動性”、“遊戯性”の各側面と、リズム即興の表現特徴との間の関連性について検討した。また、付加的に、課題として提示された感情(喜び、悲しみ、怒り)とリズム即興の表現特徴との関連性についても検討を行った。いくつかのリズム即興の表現特徴と性格特性指標において、関連性が認められた。



## 1. 音密度と性格特性との関連性について

分析結果から、リズムを自由に即興するとき、ちょっとしたことにも不安や心配を持ちやすい、緊張しやすい、気分がめいったり落ち込んだりする傾向が強いという性格傾向を持っている人はゆったりとしたリズムを刻みやすいということが考えられる。これらの性格特性が音密度に反映する理由としては、不安やストレス、心配を持ちやすいという性格特性を持った人が、リズム即興の際にまさにそのような心理状態に襲われ、心身ともに硬くなってしまい、そのことが表現活動を抑制させ、結果的に活発な演奏を滞らせたためであると考えられる。また、自由にリズム即興をするとき、ゆったりとしたリズムを刻む人は、内的世界を想像したり、自分の不安やストレスなどの心の動きに敏感である傾向が強いということが考えられる。「空想」「内的敏感」といった性格特性のある対象者は、たびたび現実世界から離脱して空想したり、心の動きを敏感に気付いたりするために、内面をリズムとして断続的に捉えることへの抵抗が生まれ、積極的にリズムを刻むことが出来なかったと考えられる。あるいは、心の流動的なイメージを表現するために、持続的な音を出すことにとどまり、その結果、演奏全体の音数が少なくなり、密度の低い演奏になったとも考えられる。

## 2. 取りかかりと FFPQ との関連性

分析結果から、即興へすぐに取りかかる人は、衝動性が高いということが考えられる。これはロールシャッハテストや箱庭療法の初発反応時間に対する解釈と一致している。また、大勢の人と一緒に生活を好む人は、自由に即興するときの取りかかりが早い傾向にあるということが考えられ、これは、川口(2002)の結果を支持するものであった。「自由」では自己の内面と向き合って、オリジナルなテーマでリズム即興をしなければならないため、他の課題よりも長く考えてから課題に入るのが一般的である。だが「群居」群は、自己を表現しすぎることで集団(他の対象者や実験者)からはみ出してしまうことを恐れ、実験者が迷惑しないかどうかを気にかけ、早々と演奏を開始したとも考えられる。また、「注意回避」傾向の強い人は取りかかりが早い傾向にあったが、これは実験者からの注目から早く逃れるために、手早く取りかかったということが考えられる。また、逆に「注意獲得」傾向の強い人は、よく考えてよりいいものを作り、注目を浴びたいという思いから取りかかりが遅かったということも関連していると考えられる。よって、群居・同調・注意回避の超特性である<内向性>とも関係している可能性がある。

## 3. 楽器変化数と性格特性との関連性について

分析結果から、芸術を好み情操が豊かな者は、楽器を多く変化させる傾向にあるということがいえる。その他に、楽器を多く変化させる人は、外向的でリーダーシップをとり、また激しい活動を好み他人から注目されることを好む傾向にあるということがいえる。<外向性>、「活動」に楽器変化数が反映される理由としては、楽器を変化させることそのものが活動的な行為であるということが挙げられる。また、変化に臆することなく大胆に生きる姿勢が、楽器を挑戦的に変化するという行為に表れたと考えられる。また、「注意獲得」については、楽器を多く変化させることで、他の対象者と差をつけて実験者からの注目を獲得したいという意思が読

み取れる。つまり、楽器変化数は活動量を示す指標であると考えられ、その活動量を左右する動機づけの高さを支える性格特性となるのが<外向性>、「活動」、「注意獲得」、「衝動」、「芸術への関心」であると考えられる。しかし、これらの性格特性と密接な関係にあると思われる<外向性>の中の「興奮追求」や、佐藤(2002)の情緒不安定因子に該当する「気分変動」との有意な関連が見出せなかった。この理由としては、楽器変化数が準備した楽器の数に依存している可能性があることが挙げられる。よって、準備する楽器数を変化させて追研究を行う必要がある。また、課題と楽器変化数とを分析したところ、自由課題において有意に変化数が多かった。つまり自由課題では、比較的楽器が多く変化する傾向が見られたということである。これは逆に“喜び”“悲しみ”“怒り”課題の演奏においては、楽器変化数は課題によって統制されていたと換言できる。よって、対象者が課題に左右されずに楽器変化数を決定出来るような工夫をすることが必要である。

#### 4. 使用楽器の種類と性格特性との関連性について

分析結果から、のんきで気楽な人、ストレスがあってものんびりくつろいでいられる人よりも、ちょっとしたことにも敏感で不安や心配を持ちやすい人、緊張しやすい人の方が、全体的にバスドラムをよく使用したということがいえる。これは、バスドラムという安定した大きな楽器の音色や振動が、心配性の人や緊張度の高い人に、精神的に包み込まれるような安心感を与えたものと考えられる。また、旧来の伝統を守ろうとする人は、和太鼓を良く使うという傾向があった。これは、和太鼓が日本の伝統楽器であることが関係していると思われる。また、“怒り”を表現するときに、バスドラムとシンバルが比較的多く使用された。これらの楽器は共通して、比較的大きな音の出せる楽器である。この結果は、“怒り”は音のレベルが比較的高いという山崎(2002)の結果を支持するものであった。また、カスタネットは、すべての課題において使用度が低かった。この原因として、カスタネットという楽器に、感情を表現するための楽器的特徴が少ないということが考えられる。強弱の幅が少なく、音色も奏法によって一変するというわけでもない。そういった点が、感情表現には不向きであったと考えられる。

#### 5. リズムカテゴリーと性格特性との関連性について

本実験でのリズム即興は、山崎(2002)を基に「繰り返し」「単調」「その他」に分類した。しかし、複雑で自由なリズムを3つのカテゴリーに分類するのでは、FFPQとの関連を見るには大まかすぎ、個々の対象者のリズム即興を十分に反映したカテゴリーであるとは考えられなかった。そしてまた、「その他」に入るような演奏こそ、分析する必要があるのではないかと考えられる。一方、課題とリズムカテゴリーとの関連をみると、“喜び”“悲しみ”“怒り”は「単調」、「自由」は「繰り返し」がそれぞれリズムカテゴリーの特徴として挙げられる。この結果は、明るい印象の感情(喜び)では「繰り返し」のリズムになる傾向にあるという結果を出した、山崎(2002)の研究結果と一致しないものであった。その理由としては、一つに、先述したように、本研究での使用楽器が多様多様であったということが考えられる。まず、タンバリンを使用した結果、金属音のぶつかり合いによるトレモロ演奏をする対象者が多数見られ、その演奏部分をリズムとして抽出することが困難であった。その結果、感情によってリズムカテゴリーの差

異がみられなかったのであろう。また、対象者は、リズムそのものというよりは、楽器の特性を用いて感情を表現していたということも理由に挙げられよう。その一因として、対象者がすべて“音楽経験なし群”であったため、リズムに対しての抵抗感やリズムの引き出しが少なかったことが予想される。しかし、“自由”のみにおいて「繰り返し」が多く見られたということは、その演奏にリズム的な意思が見られたということである。このことは、専門的な音楽訓練を受けていない者であっても、自己の感情を、意思を持ってリズムで表現できるのだということをも物語っている。よってリズムカテゴリーの内容を更に工夫することで、リズムそのものとの性格特性との関連性を検討することが可能になるであろう。

## 6. リズム即興と関連性の薄い性格特性

本実験の結果からは、FFPQの〈愛着性-分離性〉、またその中の「温厚-冷淡」、「協調-競争」、「信頼-警戒」、「共感-非共感」、「他者尊重-自己尊重」からは有意な結果が見られなかった。このことから、リズム即興には、対人的に他者と一体化しているか、他者と分離・個別化しているかという性格特性は、関連性が薄いものと考えることが出来そうである。その理由として、本実験が個別場面であったことが挙げられる。すなわち、対象者は日常に存在する他者との関連性から切り離され、非日常を体験する中で、性格特性の中でもより自己の内面的な問題と向き合うことができたのではないだろうか。Robertson-Gillam (1997) は、即興を通して自分自身の側面を発見することが出来るという見解と一致しているものと考えられる。

## 7. 問題点及び改善点

本研究の結果は、超特性との明確な関連が見られたものはわずかだった。この原因として、なるべく本来の音楽療法の形態から離れないように取り出そうと試みたことが、実験枠の統制を緩めてしまったことが考えられる。そのひとつとして、山崎 (2002) の結果や本実験の分析Ⅱの結果からもわかるように、課題として与えた感情そのものが交絡していることが考えられる。よって今後は、リズム即興と性格特性との関連性をより確かに示すために、方法論的工夫が必要となる。しかし、本研究のように、音楽の要素と性格特性との関連を実証的に研究した先行研究は今までに見当たらないため、今回はそこに意義があると考えられる。そして、リズムだけでなくメロディなど、他の音楽の要素と性格特性との関連性なども検討すると、これらは即興音楽療法現場において、クライアントのより深い理解への一助となるだろう。また本実験は、一大学における特別な音楽経験を有さない者に限って行われた。広く一般化するためには、同等な実験を様々な属性の対象者に行い、更にそれらを比較検討する必要があるだろう。

## 引用文献

稲田雅美 2003 ミュージックセラピー対話のエチュード。 ミネルヴァ書房。

石村真紀・高島恭子 2001 音楽療法における即興とは。 石村真紀・高島恭子 (編) 即興による音楽療法の実践。 音楽之友社, Pp. 14-34.

川口まどか 2002 箱庭作品とその制作傾向についての研究—中学生・大学生・高齢者の分析から—。 平

成 14 年度兵庫教育大学大学院修士課程学位論文.

- 益子務 1996 音楽療法の展望とその方法論. 梅本堯夫(編) 音楽心理学の研究. ナカニシヤ出版, Pp. 343-353.
- Robertson-Gillam, K 山田尚子他(訳) 1997 響きあう心の虹-音楽療法の地平線-. 奈良市社会福祉協会.
- 佐野友泰・関口洋美・井上理沙・土田昌司 2000 コラージュ作品の素材内容と性格特性の関連. 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 309.
- 佐藤静 1998 コラージュ療法の基礎的研究-コラージュ制作過程の分析-. 心理学研究, 69, 4, 287-294.
- 佐藤静 2002 コラージュ制作者の性格特性と作品特性. 心理学研究, 73, 2, 192-196.
- 谷口高士 1991a 言語課題遂行時の聴取音楽による気分一致効果について. 心理学研究, 62(2), 88-95.
- 谷口高士 1991b 認知における気分一致効果と気分状態依存効果. 心理学評論, 34(3), 319-344.
- 辻平治郎 1998 5因子性格検査の理論と実際-こころをはかる5つのものさし-. 北大路書房.
- 山崎晃男 2002 音楽による感情のコミュニケーション(2) 未経験者の表出ルールと解釈ルール. 音楽情報科学, 115-120.